

デジタル化により現像の省力化 患者さんに優しい 固定式天板も評価



院長 砂川 正興 先生

一般撮影のCR導入をきっかけに デジタル式透視台を導入

胸部の単純撮影用装置をCRにすることになり、フィルム出力の設備を統一するため透視台もデジタルにしようと思ったのが導入のきっかけです。これからは現像液の廃液処理費用もどんどん高くなると思われますので、この際現像液が要らないデジタル透視台に切り替えようと考えたのです。私は昔から透視台は島津しか使ったことがなく、何世代かの透視台を、X線管球の交換を行いながら長年にわたり使い続けてきました。これらの背景から、今回このFLEXAVISIONの導入に至りました。

断領域は消化管に特化

最近では上部消化管の透視検査は年間100件程度で、一方内視鏡検査は1,000件を超えています。1月はちょうど人間ドックのシーズンなので毎日透視検査を行います。人間ドックシーズンの後は大和郡山市の胃ガン検診を受け入れています。透視検査をしない時は、ちょうど良い高さなので内視鏡時のベッドとして使用しています。

消化管以外の用途で撮影や透視をするケースは少ないと思います。この地域では結構医師がおりますので、自分の専門以外の領域は手を広げないようにしています。専門領域による棲み分けは必要だと思うのです。そういう意味で、私は消化管透視検査という分野ではちゃんとした診断をしたいと思っています。

消化管の透視検査の他は、例えば異物を飲み込んだ患者さんの検査依頼が歯科医から来ることがあります。その際は透視を行い、異物があれば一般撮影装置で腹部単純を撮ります。FLEXAVISIONで簡単にCRカセット撮影ができるということですので、今後は使用していきたいと思っています。その他注腸検査はどうしても必要な患者さんについては実施しています。

使い勝手の良い天板固定式 装置のコンパクトな点も評価

天板固定式の透視台を使うのは初めてですがすごく良いですね。年配の患者さんは天板が動くと結構驚かれるのですが、この装置なら患者さんが怖がらないので良いと思います。装置自体の大きさが従来のものに比べコンパクトになって、使い勝手が良くなりました。

画像診断を大切に考え 装置についても重視

デジタル透視台は検査後にいろいろと画質調整ができるというのが特長だと思うのですが、現状ではあまり使用していません。当院のように専属の技師がおらず、医師1人が全てを行う場合でも簡単に操作できるのであれば非常に良いですね。

私は画像診断を大切に考えており、検査時の発泡剤とバリウムの飲ませ方など自分でもいろいろと工夫しています。また、当院の施設規模からすると、X線機器にしても内視鏡にしても結構高価な装置を入れていると思っています。それは装置の差できちんと診断できないということがあってはならないと考えているからです。ですから、透視台についてもある程度の装置は必要と考えた上での装置選択でした。



導入を
お考えの先生への
一言

固定式天板により、患者さんが安心して検査を受けられてとても良いと思います。自分で乗ればわかると思いますが天板が動くのはすごく怖いのです。この機能は一押しです。